
微妙なやる気！テキトーサンタがゆく

無名 新人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微妙なやる気！テキトーサンタがゆく

【Nコード】

N1283J

【作者名】

無名 新人

【あらすじ】

クリスマスの夜。赤い服を着た女の子が俺の家になぞか上がりこんできた。

——12月24日午後11時——

年末の追い込みで連日連夜の深夜残業。

とは言え、クリスマスぐらいはいくらか配慮をしてくれる。

都内のこじんまりとしたワンルームに帰宅して、とりあえずテレビをつけた。

コンビニで買ってきたケーキを広げ、安いシャンパンを袋から出す。若手社員の俺には、予定なんて入れるヒマはどこにもなかった。

むしろ予定外に早く帰れてしまったため、何をすればいいかわからない。

こたつに入って、ぼんやりとクリスマス特番を見る。

テレビは随分と前に見なくなったが、そのころと変わり映えない。

そんなことを考えていたとき、ふと物音に気づいた。

なにやら入り口の方から、かちゃかちゃと聞こえてくる。

何事かと、振り向いたそのとき――

「おい―す」

そいつは間の抜けるようなあいさつをした。

玄関に立っていたのは、これみよがしに赤い服と赤い帽子を着た小柄な女の子だ。

「……なんだと？」

鍵、開けたのか？

そもそも誰だ、という怪訝な視線なんてお構いなしに、ブーツを脱いで家へ上がりこむそいつ。
歳は高校生ぐらい……か？

「外、寒いッスねー」

はぁっーと息を吐き、白い手をこすりあわせるそいつ。

そりゃ肌に突き刺さるような寒さだろうよ。

そんなミニス力だったら。

そのままぺたぺたと目の前を通り過ぎ、

「おい！勝手にコタツ入んな！スリッパも履いてんじゃねえ！」

「いいじゃないスかー。減るもんじゃなし」

はぁーさむさむ、と肩までこたつに入るやつ。

なんか手強そうだ。

とりあえず俺もこたつに入ろう。

「で。どこの家出娘だ、おまえは」

「サントッス」

「栃木か？茨城か？」

「いや、サンタ」

「三田ってどこだよ」

「じゃあ北海道あたりで」

気だるそうに答える家出娘。

「ってケーキ食ってんな！」

イチゴショートをわしづかみにして食い始めやがった。

少なくとも、こたつ入ってクリスマスケーキ食うサンタなんて聞いたこともない。

「まあケチケチすんなよ」

俺の肩をばしばし叩く家出娘。

こいつ、かわいくなかったらとつくにたたき出してるのに。

「何しに来たんだおまえは……」

「これこれ」

もぞもぞと白い袋の中からなにやら取り出した。
リボンで包装された手の平サイズの四角い箱。

どうやらプレゼントらしい。

「はあい、メリクリメリクリー」

ケーキをほおばりながら、チリンチリーンとベルを鳴らす家出娘。

なんだろう、小バカにされてる気がしてならない。

とりあえず箱を開けてみる。

「中から……箱？」

箱の中から、同じような箱が出てきた。

「ひとつーっ」

すっかり暖まった様子の家出娘。
楽しそうだ。

ひとつ、ということはまださらに箱があるってことだろう。
とすれば――

「おい家出娘。これ、中身あるんだろうな？」

「さあ」

中身がわからんってどういうことだ。
それにしても、サンタと呼ばなくて良いのか、こいつは。

と、なにやら紙を見ている。

「えー、ふんふん……『いつまでも箱が続くプレゼント』」

「は？何か意味あんの、それ？」

「あーっと。『プレゼントを開ける瞬間の感動を、永遠に味わえます！』……だつてさ」

「だつてさ。じゃない！なんだその欠陥商品。箱マニアにでも送ってやれよ」

「今から箱マニアになればおっけーッスよ」

「箱開けのどの辺にドラマが？右斜め45度から指を入れるとか？それとも、かさりって音か？……これっぽっちも感動せんわ！」

「ええー？見るからに箱好きそうな顔で何言つてんスカ」

「どんな顔だよ、って俺に指を差すな！とりあえずこれは返すぞ」

「わがままッスねー」

家出娘はまたごそごそ袋をあさりだした。

そしてほいつと何かを手渡す。

「はあい、めりくりめりくりー」

チリンチリーンとベルを鳴らす家出娘。

「……………」

無言でチロルなチョコを握り締める俺。

こんな、こんなひとくちチョコを小娘にもらって、

「ふざけんな！」

——ちょっとうれしいじゃないか！

そんな自分に腹が立った。

「ほんのりとしたあまあいひとときをあなたにー」

「この棒読みがつー！ほんのり過ぎて甘さなんぞ感じられんわ！」

「全国のチロルファンに失礼ッスよ」

「なんだそりゃ……って！おまえケーキ全部食いやがったな！」

「コンビニケーキ。なかなかのお味で」

「誰が感想を言えと。チロルチョコーつで割りに合わんわ！」

「ええー？うまいっしょー」

ポンツと勢い良くコルクが抜ける。

「何気にシャンパンまで開けんな！なんなんだいったい！」

「さんたー」

シャンパンをラッパ飲みし始めた、さんたー。

どんどんビンの中が無くなっていく。

「お、おい」

「ふはあ」

たんつとシャンパンをこたつに置く。

「おいおい……」

「だいたいツスよ。流行だかなんだか知らないスけどね」

いきなり語りだした。

ふへいなんて言いながら続ける家出娘。大丈夫なのか？

「このくそ寒い日に、ミニスカになんなきゃいけないこっちの身にもなれって話ツスよ」

いや、何言ってるかわからん。

とりあえず家出娘も苦労してるってことか。

まあ、家を飛び出して辛いことなんていくらでもあるだろう。

……しまった。追い出せなくなりそうだ。

「そうか、大変だな」

この娘の家出ストーリーがひとりで思い浮かぶ。

きつと親はパチンコで家にほとんどいないんだろう。

それに加えて高校の学費がなくて、バイト代もせしめられてるのかもしれない。

「そうッスよ。『ハーレムが欲しい』だの『世界征服したい』だの、アホかって話ッス」

目が据わり始めていた赤鼻のさんたーがまくしたてる。

「ハーレムなんて望む奴はどうせすぐ飽きるし、実際にあったら大事なもん失うだろうに、なんて思うわけッスよ」

ハーレムなんて夢見てるのか。ヒドイ父親だ。

「んで、世界征服して何したいんよ？つて。やることなすことつまんなくなつて、後は死ぬしかないっしょ」

一家心中から逃げ出して来た、のか？

かわいそうな……。

「よくわかった。好きなだけここにいと良い」

がっしりと家出娘の肩をつかんでうんうんうなづく。

「何言つてんスカ、あんさん」

じと目で見られたただだった。

「おっと、お仕事お仕事」

頭を揺らしながら袋の中から何かを取り出した。

ふらふらと立ち上がり、俺の方へ歩みよる。
何かを頭にかぶせようとする。

「なんだこりゃ？」

どう見てもただの赤ヘルだった。

「そしてこれをー」

にやけた面のアイマスクを付けられる。

「はあゝい、おめでたいおめでたい」

ぱふーと笛を吹く家出娘。

もうメリクリですらない。

まあ確かに、今の俺の格好はおめでたい。

「さーさー、今から逝きたい世界を妄想するんだー」

死ねと言われてる気もしたが、お遊びに付き合ってやろう。
行きたい世界ねえ。

どうせならRPGみたいなファンタジーの――

途端、意識が遠くなった。

――20分後――

「うあああああつああつ！助けてくれ！」

アイマスクと赤ヘルを取ってくれたようだ。
びっしりと汗が流れていた。

「はあい、1名様お戻り」

「なんだこりゃ！ぜんっぜん行きたい世界じゃないだろうが！」

「異世界に飛べたんじゃないんスかー？」

「あああ行けたとも！モンスターがみんなチワワだったけどな！」

「おおー、かわいいツスねー」

「あんなもん倒せるか！しかも、ほとんど姫に追い掛け回されてただけだし」

「良かったじゃないスかー」

「ふざけんな！どこもかしこもみーんな、マツコデラックスってなんなんだ！」

「えー。ふんふん、『異世界の悪夢セツ』ファンタジー野郎も瞬く間に矯正！」

「矯正されてたまるか！……じゃねえ、楽しくもなるともない！」

「良さそうだと思ったんスけどねー」

「ちっ！他はないのか……って」

こんな道具、明らかにおかしい。

「おまえ、ほんとにサンタなのか!？」

「そう言ったつしょー」

「そ、そうか!なら……」

驚いてるヒマはない、欲しいものをとつと頼もつ。

「あー。もう時間ッスね」

「はあ!？」

時刻は12時ちょうどになろうとしていた。

「結局おまえ、なにしに来たんだ？」

「よいこにプレゼントを渡しにー」

「いや、俺25だし」

「精神年齢がよいこみたいッスよ」

ぐさりと音を立てて何かを貰かれた気がする。

「……まだ何ももらってないぞ」

こういうところが子供なのか。

「何言ってるんすか。もうあげたつしょー」

「は？」

全く心当たりが無い。

こたつから出る、家出娘改めサンタ。

「プレゼントは最初から決まってるんす」

とてととと玄関に向かうサンタ。

「楽しかったつしょ？」

振り返って、にっこりと言う。

いや、それはちよつとうなづきがたい。

人様ん家で勝手にくつろいでただけな気がする。

「あんさんの望みは、『誰かと一緒に楽しく過ごす時間』」

ブーツを履くサンタを呆然と見つめる。

確かに、もう三年も過酷な仕事と勉強だけの毎日だった。
生まれ育った土地を離れてから、誰かと遊んだ記憶はない。

俺は寂しかったのか。

「まさしくよいこのお願いッスねー。ふしし」

歯を見せて笑うサンタ。
扉を開け、玄関に立つ。

「そんじゃー今度こそ。めりくりめりくりー」

チリンチリーンとベルを鳴らしたサンタ。

「おおっさむー」と出て行った。

俺はその姿を見えなくなるまでじっと見ていた。

俺に必要なもの、か。

携帯を取り出して電話をかけた。

「ああ……親父か。いや、ケガとか病気じゃないけど。ああ、ああ……。ちよつとな、今年の正月は休みとってそっちで過ごそうかと思つて——」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1283j/>

微妙なやる気！テキトーサンタがゆく

2010年10月28日07時02分発行